

単語の「コア」と言葉の獲得・習得（1）

矢 沢 国 光 （ろう・難聴教育研究会）

- 1 はじめに
- 2 同音異義語と多義語
- 3 多義語の分析
 - (1) 「掛ける」の基本的意味——ネットワーク・モデル
 - (2) ことばの獲得・習得・使用に役立つ多義分析とは——コア論
- 4 英語基本動詞のコア
 - (1) break のコア
 - (2) コアで carry と bring のちがいを学習する
 - (3) コアの決め方
- 5 日本語動詞のコア
 - (1) 「かける」のコア
 - (2) 手話では日本語の「掛ける」をどう表現しているか
 - (3) 現象素のイメージ図
- 6 コア理論の日本語学習への応用
 - (1) 複合動詞の指導への応用
 - 1) 日本語学習者の「～こむ」理解度調査
 - 2) 「～こむ」のコア
 - 3) 「～こむ」には4つのタイプがある
 - 4) コアから見た日本語学習者の調査結果の分析
 - (2) 格助詞の指導への応用（以下次号）

1 はじめに

北海道教育委員会の「手話導入」宣言に反発した、森川元小樽聾学校校長が、読売新聞に「手話よりも『読唇』優先で」という記事を投稿しました（2006年12月7日）。「聴覚口話法の指導は並大抵のものではない。手話を使わせないために両手を縛って教えたこともある」という文章に対して、卒業生たちから「この記事を読んで、当時の記憶が蘇る。忘れたくても、忘れたくても思い出してしまう。痛い思い、辛い思い、悔しい思い。」などの反論が殺到しています。（ろう教育の明日を考える連絡協議会会報第50号2006年12月号参照）

元校長の投稿は、手話の、言語としての欠陥を列挙して、手話はなぜだめなのかを説得しようとしています。こうした言い方は、かつては、ろう学校の中でよく聞かされたものです。

元校長の投稿に、次のような箇所があります：

手話の表現単位には、同表現異義語がたくさんある。「準備」「整理」「片づける」は同じ表現である。

これに対する反論として、だれでも思いつくのは、「いや、日本語にも、同音異義語はたくさんある」ということです。「はし」→橋・端・箸。これらはもともと別の単語ではないか、というなら、もともと「同じ単語なのに異なる意味に使う」言葉（多義語）もたくさんあります。

「さかな」は、動物の「魚」でもあり、酒の「肴」でもあります。

「うた」は、声を出して歌う「歌」でもあり、古今和歌集の「歌」（和歌）でもあります。

「うつ」は、「太鼓を打つ」「その話しは胸を打たれた」「早めに手を打つ」「殿様の敵を討つ」「イノシシを鉄砲で撃つ」など、さまざまな意味に使われます。

こうした「反論」は、「手話も日本語も、同じ単語がさまざまな意味に使い回されるという点では同じであり、そのことをもって、言語の優劣の比較はできない」ことを、主張しています。

これはこれで、まちがってはいません。こんなかんたんな、だれでも思いつくことさえ無視して、「手話が劣っている論拠」としてあげるのは、手話に対してよほど反発しているのではないのでしょうか。

だが、前回までこの「言語学入門」につきあってこられた読者には、この「反論」では、言い足りないことが、おわかりだと思います。それは「多義語」の存在は、言語の欠陥ではなく、むしろ、言語の生産性のあかしであり、言語がコミュニケーション手段として機能するための不可欠の要因であることが見過ごされているからです。人は、古い言葉を用いて、新しい事物・事態を表します。そのために、一つの言葉が、次々と新しい意味に使われます。何世代にもわたる「言葉の進化」の過程がそうであり、個人の言語使用という一日単位の「言葉使いの変化・更新」の過程も、そうなのです。言葉は、コミュニケーションの中で日々新たに「多義」を生成しているのです。手話にせよ日本語にせよ、その語彙がたくさんの「多義語」をもつことは、決して、手話や日本語の「欠陥」ではなく、手話や日本語が、それぞれの言語コミュニティの生きた言語として豊かに使われていることの証拠なのです。

2 同音異義語と多義語

「橋」と「箸」は、ひらかなで書くと同じですが、アクセントは異なります（高い音を太字で表せば、橋はハシ、箸はハン）。つまり、音形が異なります。

これに対して、アクセントも含めて、音形が全く同じなのに、意味が違う単語があります。「雲」と「蜘蛛」、「川」と「皮」、「墓石に水をかける」と「迷惑をかける」、「(このことを)指す」と「(蜂が)刺す」(下線部分)などです。「記者が汽車で帰社した」というものもあります。[ちなみに、パソコン(一太郎)で「きしゃがきしゃできしゃした」を漢字変換したら一発でこうなりました。パソコンもずいぶん賢くなったものです。]

これらの中で、「雲」と「蜘蛛」や「川」と「皮」などは、意味の間に全く関連がなく、「もともと別の言葉なのに、たまたま同じ音形を持っているだけだ」と考えられます。

それに対して、「墓石に水をかける」の「かける」と「迷惑をかける」の「かける」や「向こうの山を指す」と「蚊が刺す」は、たしかに、実際にコミュニケーションの中で使われる意味は異なりますが、意味の間には共通性があり、同じ言葉が文脈の中で異なる意味を持つようになったと考えた方が自然です。

「雲」と「蜘蛛」のように、音形がたまたま同じではあるが別の語と見られるものを「同音異義語」とし、同じ言葉が、場面(文脈)によって別の意味を表していると考えられる語を「多義語」と言って、同音異義語から区別しています。

ただ、「橋」と「端」(アクセントはいずれも「ハシ」で音形は同じ)のように、意味の間に関係があるようにもないようにも見える場合があります。「書く」と「掻く」も、辞書には別の項目として登録されていますが、「語源は同じ」と書かれています。「橋」と「端」、「書く」と「掻く」のように、同音異義語なのか、それとも多義語なのか、かんたんに分けられない語もたくさんあります。

私たちの目的は、ただ分類することではありません。同じ言葉が多様な意味を獲得して拡張使用されていくメカニズムを探り、それを言葉の獲得・習得に役立てたいということにあります。わたしたちは、単語の獲得と拡張使用の過程は、「共通する意味」が子どもの頭の中に形成され、その「共通する意味」が、メタファーやイメージ・スキーマによってさまざまな新しい意味の表現へと広がっていく、と考えます。ですから、こうした語彙の発達のモデルをつくるのに合っている言葉——語彙発達の基になる「共通の意味」を持っている言葉——を「多義語」と考えればよいのです。【註】

【註】同音異義語と多義語のほかに、もう一つ「単義語」を区別すべきだという人もいます。「あそこで遊んでいる

子は、とんでもないいたずら小僧だ」の「子」は男の子、「あそこにかわいいリボンを付けた子がいる」は女の子。だが「子」という言葉自体に男の子／女の子という二つの意味があるわけではなく、文脈によって男の子になったり女の子になったりするだけだから、「子」は「単義語」だ、という考え方です〔深山洋介・深田智、第4章多義性、松本曜編『認知意味論』136P、大修館書店2003〕。

しかし、「文脈の中で異なる意味を獲得する」という点では、「子」も「かける」も同じです。言葉の拡張（異なる意味を獲得すること）のメカニズムが、

遠い駅〔空間的な隔たり〕→遠い過去〔時間的な隔たり〕

橋を架ける〔目に見えるもの（橋）をこちらから向こうへと伸ばして行って対象を捕まえる〕→電話をかける〔目に見えないもの（話しかけ）をこちらから向こうへと伸ばして行って対象を捕まえる〕

のように「メタファー」や「スキーマ（意味を表す図式）」で拡張するのか、

子>男の子、女の子

のように上位概念から下位概念の特定化によって拡張するのか、のちがいにあります。

言葉の拡張のメカニズムは、さまざまあり得るという予想のもとに、ここでは、「単義語」の区別までは考えずに、話を進めることにします。

3 多義語の分析

中学校で初めて外国語（英語）というものの学習を始めたとき戸惑うのは、日本語と英語の単語が1対1に対応しないこと、同じ一つの単語が、さまざまな意味に使われることです。

「食べる」はeat、「飲む」はdrinkと教わります。スープは「飲む」ものだからdrink soupかと思うと、そうではなくてeat soupだという。さらに、「何か食べるものいただけますか？」はCan I have something to eat?だという。haveは「持っている」だと思っていたら、「持っている」とは全く関係のない（ように見える）「食べる」という意味にも使うというのだ【註】。

【註】具体的に食べる行為を表すときはeat、食事を表すときはhaveを使う。また、drinkは、飲み物（水、酒、ミルクなど）以外の液体や固形物を飲むときには使わない（Eゲイト英和辞典）。

これは、外国語を学習するときの悩みですが、聴覚障害児が日本語を習得していくときにも、同じ困難があるはずです。

「昨日は強い雨だった」と書きたかったのに、「昨日は力雨だった」と書いてしまう（ろう学校中学部生徒）。たしかに、手話では「強い」は「力」です。しかし、手話と日本語の語彙は、1対1には対応していません。

「うつ」は、「鉄をうつ」「太鼓をうつ」のように、たたいたり殴ったりする動作を表す動詞ですが、「そばをうつ」「バクチを打つ」「胸を打つ」など、さまざまな意味に拡張して使われています。古語辞典によれば「中納言の御車を打つ」のように「石を投げつける」というときにも使われたようです。しかし、今では「石を打つ」とはいわず、「石を投げる」です。弓矢は「射る」ものでしたが、鉄砲が出現すると「鉄砲を射る」とはいわず、「鉄砲を撃つ」と言うようになりました。文明が進んで、電報が出現すると、これにも「電報を打つ」と「打つ」を使う。しかし、電子メールが出現したとき「メールをうつ」とは、あまり聞きません。このように見てくると、「打つ」という動詞には、相手に対して一瞬にして届くような素早い作用を及ぼすときに使われるようです。かつては「石を打つ」もそう

した作用の一種であったのが、鉄砲が出現して、「石は投げるもの」に格下げされてしまったのかもしれませんが。このように、新しい事物を表現するのに、どの単語を使うかが自ずと決まってくるというのは、その言語コミュニティに共通する認識——「うつ」という動詞の「意味の素」についての共通イメージ——があるからでしょう。それは、言葉で説明しろと言われても説明できないが、「この言い方は自然か不自然か」と問われれば、その言語の母語話者ならば、自然か不自然か判別できる、という類の認識です。

「カバンを肩にかける」の「かける」が、なぜ「迷惑をかける」「電話をかける」「ブレーキをかける」「レコードをかける」「時間をかける」のように使われるのか。はたまた「帰りかけたときに、呼び止められた」の複合動詞「……かける」の「かける」には、どう繋がっているのか。

「レコードはかけるもの」「テレビはつけるもの」……と、一つ一つ覚えさせていく、というのが、従来の教え方でした。

聞こえる子どもが日本語を獲得してきたのも、このようにして、大人や、すでに日本語の使い方を知っている者たちが話すのを聞いて、一つ一つ、覚えて、獲得してきたのでしょうか。

そのようにして、——用例を一つ一つ覚えて——獲得した言葉（の使い方）も、たくさんあるでしょう。

しかし、原理的に考えて、それだけではないはず。というのは、「レコードをかける」と言える子どもは、新しい対象——例えばCDプレーヤー——が登場してきたとき、「CDプレーヤーをかける」と、言うでしょう。そして、同じ器械でも、「テレビをかける」とは、言わないでしょう。ラジオについては、かつては「ラジオをかける」と言いましたが、最近では「ラジオをつける」という人が多いようです（後述）。

すると、次のような仮説を立てることが許されそうです。「かける」という動詞の意味として、「CDをかける」はよいが「テレビをかける」はおかしい、という何かがあるのではないか。子どもは、たくさんの「かける」の用例を体験するうちに、「かける」に内在するこの「何か」——「かける」という語の普遍的（基本的、抽象的、一般的）意味——を習得し、それに基づいて「かける」という語を使用したりしなかったり、また解釈しているのではないか。この「かける」という語に内在する普遍的な意味を抽出し、ある単語の多義性をその単語の普遍的意義によって説明しよう、という考えが出てきます。後述の「コア論」もそうした多義性を普遍的意義から説明する理論の一つです。

では、「かける」のコアは何か、と問われても、困ります。『日本語コア辞典』といったものは、まだないからです。しかし、最近では、多義に関心を寄せる研究者も増えてきて、参考にできる研究もあります。

（1）「掛ける」の基本的意味——ネットワーク・モデル

日本語を研究している院生の論文に、「かける」のさまざまな意味のうち、一部についてですが、詳しく記述しているものがありました【註】。「[物体]ニ(ヲ)かける」の用例が、類義語「のせる」「さげる」「かぶせる」で言い換えられる3つの意味群に分けられるとし、それぞれの「基本的意味」を抽出しています。[以下、用例は、矢沢が簡略化して引用]。

【註】 廣瀬裕子、多義動詞「かける」の基本的意味——類義語「のせる」「さげる」「かぶせる」との対応による意味の異なり——。名古屋大学留学生センター「名古屋大学日本語・日本文化論集第12号2004」所収。

意味①（のせる）の用例：両肘をロープにかける、岩の縁に両手をかけてよじ登った、椅子に腰をかける、ロープには足をかけるための結び目がある

意味②（さげる）の用例：玄関に提灯をかける、首に花輪をかける、窓にカーテンをかける、眼鏡をかける

意味③（かぶせる）の用例：死体にビニールがかけてある、車にカバーをかける、毛糸のショールを膝にかける

廣瀬氏は、意味②（さげる）の「基本的意味」を次のように規定します：

意味②（さげる） 〈人間が〉〈ある程度高さと面的な広がりを持つ物の上に〉〈物を〉〈移動させて〉〈物の一部を〉〈物に〉〈物が物を跨ぐような形で〉〈接触させ〉〈接点を支えとして〉〈物全体を〉〈物に委ねて〉〈安定させる〉

右図は、意味②を図で示したものです。

意味②（さげる）の基本的意味

この多義性分析の方法の特徴は、「かける」の意味①②③のそれぞれに「基本的意味」を認め、かつ、それらの複数の「基本的意味」の関係は、一方から他方が派生される、

といった関係ではなく、双方向的な関係になっている（ネットワーク）としていることです。言い換えれば、一つの語に対して、複数の「基本的意味」（スキーマともいう）を認め、それらの複数の「基本的意味」がネットワークを形成している、という考え方です。ここで、一つの語の中の意味（スキーマ）と意味（スキーマ）は、かならずしも並列・対等ではなく、次のような関係にあると考えます
[深山洋介・深田智、第4章多義性、松本曜編『認知意味論』167P、大修館書店2003]。

（1）スキーマ関係

意味 A →具体化・特殊化→ 意味 B
←抽象化・一般化←

*例えば、「とる」の

意味A（手に持つ）→具体化・特殊化→意味B（「船の舵をとる」のとる）

（2）拡張関係

意味A→メタファーによる拡張→意味B

*例えば、「ちかい」の

意味A（「駅が近い」のように、空間的間隔が短い）→メタファーによる拡張→意味B（「近い将来」のように、時間的間隔が短い）

スキーマは、[上位のスキーマから下位の一つまたは複数のスキーマが生まれるという]階層構造をなしており、すべてのスキーマの上に立つ「スーパースキーマ」が存在することもあります。「スー

パースキーマ」は、後述の「コア」に近い
ものです（OUT のネットワーク図参照）。

こうした多義性分析の枠組みは「**ネットワークモデル**」といわれています〔深山洋介・深田智、第4章多義性、松本曜編『認知意味論』136P、大修館書店 2003〕。多義性分析の方法は、その目的によって、異なります。『認知意味論』（大修館書店 2003）という本の第4章「多義性」（靱山洋介・深田智）では、「多義語分析の課題」として、次の3点を上げています。

1. 語のプロトタイプの意味はどんなことか認定する
2. 語の複数の意味の間にどのような関係があるか調べる
3. 語のさまざまな意味全体を統括するモデル・枠組みを解明する

こうした目的のためには、「ネットワークモデル」も一つの立派な分析方法です。しかし、ここに挙げられた3つの課題には、多義語の効率的な習得・使用に役立つモデルの解明、といったことは、含まれておりません。究極的には言語学習にも役立つことを意図しているのかもしれませんが、単語の基本的意味を、母語話者の——または学習者の——頭の中に形成されるものとしては、考えておりません。

（2）ことばの獲得・習得・使用に役立つ多義分析とは——コア論

われわれの目的は、言葉の獲得・習得・使用を支援するための言語学です。すると、多義性の分析も、その目的にあったものである必要があります。

まず第一に、「かける」という動詞全体の意味がカバーされる必要があります。「かける」には、前述の

～ニ／ヲのせる／さげる／かぶせる

といった「物理的接触」のほか、電話をかける、鍵をかける、迷惑をかける、保険をかける、レコードをかける、時間をかける、など、さまざまな用例があります。これらすべて（または、ほとんど）の意味が導き出される「基本的意味」が欲しいのです。

第二に、学習者にとって容易に習得できて役に立つようなものでなければなりません。ある単語の基本的意味がいくつもあるようでは、結局、従来の「用例収集法」とあまり変わらなくなってしまいます。その単語のすべての（または、ほとんど）意味がただ一つだけの「基本的意味」から出てくるようなモデルが欲しいのです。【註】

第三に、日本語を母語として獲得する子どもの頭の中に形成されるようなものでなければなりません。子どもの言語獲得の過程は、環境に対する身体的情緒的認知的相互作用（関わり）の「発達」と並行していることが知られています。そうした視点を加味した場合、例えば「かける」の基本的意味としては、主体（自分）の環境に対する感覚的情緒的意志的な働きかけがその中心を占めるようなものであって欲しい、ということになります。

コア論は、一つの単語のさまざまな異なる意味—多義性—を、コアによって説明する考え方です。くり返していうと、「かける」という動詞は、さまざまな意味に使われますが、それらの用例に共通するたった一つの意味があると考え、それを、その言葉の「コア（核）」と呼びます。コアは、さまざま

な用例に共通するものですから、実際の場面から離れた、抽象的な意味です。子どもが、「かける」という言葉を獲得していくとき、「カバンを肩にかける」「迷惑をかける」「電話をかける」「ブレーキをかける」「レコードをかける」「時間をかける」……というさまざまな用例を、一つ一つ別々に記憶していくのではなく、「かける」のコアを獲得していく、と考えるのです。そして、実際の場面（文脈）の中で、そのコアを使って、「……かける」を解釈したり、「……かける」と表現したりしているのではないか、と考えるわけです。

コアの実際については、英語教育の分野において、研究が進んでいます。ですから、日本語のコアに進む前に、英語のコア研究とその英語教育への応用について、みておきましょう。

【註】慣用句（イディオム）といわれるものには、「基本的意味」と文脈だけでは、出てこない特別な意味があります。「骨を折る」はイデオム（慣用句）ですが、「折る」のコアからは意味が出てきません。また、「風邪をひく」が、なぜ「ひく」という動詞を使うのか。（インフルエンザをひく、とはいわない）。「風邪を引く」も慣用句とみるしかないかも知れません。

4 英語基本動詞のコア

(1) break のコア

英語の動詞のコアを田中茂範『英語感覚が身につく実践的指導—コアとチャンクの活用法—』（大修館書店 2006）に従って、break を例として、考えてみよう。

動詞 break は、文脈（実際の場面）の中で、以下のように使われます。

He **breaks** the world record. 彼は世界記録を破る。

The typhoon **broke** the electric current. 台風で電線が切れた。

The day will **break**. 夜が明けるだろう。

A fly fish **broke** the surface of water. トビウオが水上に飛び出した。

My boyfriend has **broken** his ankle. ボーイフレンドが足首を骨折した。

break には、「世界記録を破る」「電線が切れる」「夜が明ける」「魚が水上に飛び出す」「骨折する」など、さまざまな意味に使われます。英和辞典には、こうしたさまざまな意味が文例と共に載っています。

break のコアは「外から力を加えて、あるもの（の形・機能・流れ）をこわす」とします。break のコアのイメージ図は、break の対象が「動きのないもの」か「動きのあるもの」かで、以下の2通りになります。

I 動きのないもの

break a vase	花瓶をこわす
break one's neck	首を折る
break the window	窓を割る
break the loaves	パンをちぎる
break an egg	卵を割る
break prison	脱獄する
break one's heart	心を痛める

II 動きのあるもの

break the wind	風邪を遮る
break one's journey	旅を途中で止める
break an electric current	電流を切る
break the world record	世界記録を破る
break one's promise	約束を破る

break のコアのイメージ図 (I)

「力を加えてこわす」対象が

- ・形あるもの場合は、「形や機能を破損する」であり、
- ・動きの感ぜられるものである場合は、その流れをこわす、つまり「中断する」という意味になります。

break のコアのイメージ図 (II)

コアをつかんでおけば、**The day breaks.** (夜が明ける)、**a coffee break** (コーヒーで休憩)、**She broke her career to study abroad.** (彼女は留学のため、キャリアを途中で断った) も、容易に理解できる、というわけです。

コア理論の利点は「一見、無関係と思われる語義の関連性を示すこと」です。

例えば **miss** という動詞には、

I miss you. 「会えなくて寂しい」

I missed the last train. 「乗り遅れる」

という二つの、一見無関係な意味があります。**miss** のコアとして「対象を捉え損なう」があると考えれば、二つの語義が繋がります。

従来の英語学習では、さまざまな意味を、一つ一つ覚えていくしかなかった。さまざまな意味が無関係に併存している、と考えたからです。

コア理論は、一見別々の「意味」のように見えても、それらの間に「共通する意味」(コア)があり、そのコアが、文脈の中で、さまざまな異なる意味となって現れる、と考えます。

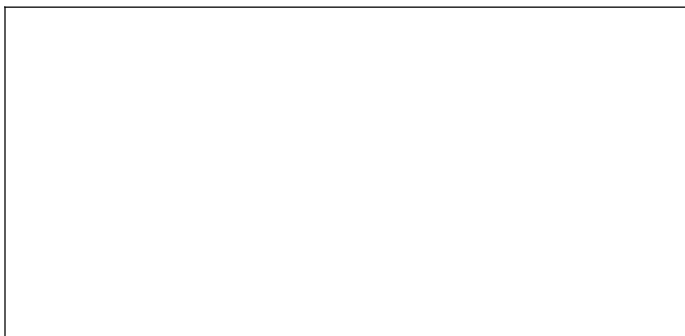
言い換えると、さまざまな文脈の中で現れる意味(文脈依存の語義 **context-sensitive sense**) からコアが抽出され、コアは、文脈に依存しない(**de-contextual**) 語義です。

(2) コアで **carry** と **bring** のちがいを学習する

田中のコア論は、すでにテレビの英会話講座に使われています【註】。ですから、コア論が実際にはどのようなものか知るには、テレビ講座の内容を覗いてみるのが、早道です。

【註】NHK テレビ講座・新感覚英会話 2006年4月から9月放送、2006年10月から2007年3月再放送。講師は田中茂範ほか。中学生レベルの基本語彙150個について、その使い方に習熟することを目標に、講座が組まれている。

コアを使うと、似たような単語の使い分けが、納得できます。例えば carry と bring ですが、carry「運ぶ」、bring は「持ってくる」と教わります。これだけでは、どう違うのか、分かりません。実際「メッセージを伝える」は、carry a message でも bring a message でもよいといえます。しかし、次のように使い分けられています。



She always carries her baby in her arms.彼女は赤ちゃんをいつも腕に抱えている。

Pipes carry water across the desert.パイプが砂漠を通して水を運んでいる。

Can you bring the box here?その箱をここに持ってきてくれる？

War always brings horror and grief.戦争はいつも恐怖と悲しみをもたらします。

carry と bring では、コアが異なります。carry のコアは「何かを身につけて持ち歩く」であり、「運んでいる移動プロセス」が強調されます。それに対して、bring のコアは「何かをある場所に移動させる」であり、移動よりも「ある場所にもたらし」ことが強調されます。上図参照。

carry のコア「何かを身につけて持ち歩く」から carrier が「保菌者」の意味にもなります。bring のコア「何かをある場所に移動させる」から Aerobics brings you health.が「エアロビクスをすれば健康になります」の意味になります。ですから、ウェイターに水を頼むときは bring を使い、お店がある品物を扱っているときは carry を使います：

Waiter.Bring me a glass of water. ウェイターさん、水を一杯いただけますか。

We carry clothing for people of all ages. 私たちはすべての年齢層の衣類を取りそろえております。

この「新感覚・キーワードで英会話」講座では、「似ている動詞の使い分け」のほかにも、「前置詞・副詞」、「似ている形容詞の使い分け」、「使い方が広がる名詞」、「文法項目」、「動詞+副詞」などを扱っています。

例えば、文法項目としては、will のコアは「何かをする意志が（今）ある」で、そこから「……するつもりだ」（意志）→「……する（つもり）だろう」→「……するだろう」（推量）と、いう言い方が出てきたとされます。will のコアが [意志→推量] であることから、will が未来を表現するのは、推量の余地が残るばあいに限られることが、なるほどと、納得できます：

(○) I will be twenty tomorrow.私は明日20歳になります。(人生、何があるかわからない)

(×) Tomorrow will be Sunday. → (○) Tomorrow is Sunday.明日は日曜日。(自然法則)

(3) コアの決め方

田中のコア論においては、動詞や前置詞のコアの決め方は、

- ・多数の用例に共通する意味を抽出する
- ・文脈から離れた意味を抽出する

という帰納的な手続きを取っています【註】。帰納的な手続きですから、人によって、コアの決め方が異なることもあり得ます。いくつかのコアの決め方が提案されたとき、どれがもっともよいか。決める基準は何か。田中は、

- ・説明の仕方が論理的に妥当であること（論理的妥当性）

・母語話者の直観に合うこと（心理的実在性）、説明されればなるほどと思うこと（心理的もつともらしさ）——合わせて「心理的妥当性」の二つがあるとします。

「言語指導のための言語学」を目指しているわれわれにとって、ここで欠けているのは、言語発達の視点です。ある言葉について、子どもが最初に獲得する語義は何か。次に獲得する語義は？……さまざまな語義をどのような順番で獲得していくのか。また、多くの子どもが比較的早期に獲得する語義は何か。こうした言語発達の調査をコアの決定に反映させることができるならば、コア論の言語指導への応用は、より確かなものになるのではないのでしょうか。

【註】田中茂範編著『基本動詞の意味論—コアとプロトタイプ』（三友社出版 1987）においては、単語の「意味」の記述法として、辞書的記述、コア、プロトタイプの3つを挙げている。ここで問題になるのは、コアとプロトタイプの関係である。プロトタイプというのは、ある語の典型的な用例である。例えば「トリ」という語を聞いて想起するものを書かせると、日本人なら、スズメの方がペンギンやガチョウよりも、先に出てくる。スズメは、ペンギンやガチョウよりもよりトリらしい。スズメはトリのプロトタイプである、という。「トリ」のプロトタイプは、あくまで「トリ」という語の用例——文脈の中で持つ意味——であり、何がプロトタイプ的であるかは、実験心理学的に決める問題である。それに対して、コアは、「トリ」という語のさまざまな用例から帰納的に抽出した抽象的な意味であり、文脈に依存しないものと考えられる。コアとプロトタイプは、レベルが違うのである。もっとも、スズメがなぜ「トリ」のプロトタイプになるかといえは、空を飛ぶ、くちばしがある、羽毛がある、翼がある、二本足など多くの「トリ」に共通する特性を備えているからであるとも言える。同様に、ペンギンは、翼がなく、空を飛ばないから、トリらしくないとも言える。では、スズメのようなトリのプロトタイプのもつ特性とトリのコアはどうちがうのか、という問題も出てくる。コアとプロトタイプの関係は、未解決である。

5 日本語動詞のコア

(1) 「かける」のコア

以上のような、英語基本動詞についての田中らのコア論を参考にして、ふたたび「かける」のコアを検討してみよう。

『大辞林』で「かける」を見ると、「懸ける／掛ける」の漢字を当てるものだけで（つまり「賭ける」「駆ける」は別として）16種の意味が列挙されています。子ども用の辞典ではどうかと、『下村式小学校国語学習辞典』（偕成社 1994年）をみると、ここでも、「掛ける」の意味として、次の14種の用例を挙げています：

①鞆を肩に掛ける。②鍵を掛ける。③鍋を火に掛ける。④病気の子犬を獣医さんに掛ける。⑤裁判に掛ける。⑥毘に掛ける。⑦祖母の健康を気に掛ける。⑧本にカバーを掛ける。⑨植木に水を掛ける。⑩時間とカネを掛けた映画。⑪迷惑を掛ける。⑫ラジオを掛ける。

【註】⑬5掛ける3。⑭帰り掛けたとき、呼び止められた。

これらの「かける」すべてに共通する基本的意味——「かける」のコア——は何でしょうか。筆者が思いついたのは、

「主体から対象（物や人）に対して、何かが伸びて行って、対象を主体の支配下におく」、というイメージです。これを図にすると下のようになります。（この図でどこまで「掛ける」の実際の用例をカバーできるか、自信はありません。コアの一つの見本として、見てください。）

「かける」のイメージ図

橋を架ける→こちら岸から橋を伸ばして行って、向こう岸を捉える

電話をかける→話し手が電話を使って、相手呼び出し、主体と話せる状態に取りこむ

鍵をかける→鍵の上の部分を下ろして下の部分を離れない状態におく [鍵のプロトタイプとしての引っかけ鍵]

迷惑をかける→相手に対して働きかけて、相手を迷惑な状態に取り込む

わが家に火災保険をかける→わが家を対象に、火災保険加入手続きをして、万一の時保険金が支払われる状態におく

時間をかける→時間に働きかけて、主体の利用に取り込む。

祖母の健康を気に掛ける。→祖母の健康に思いをいたし、主体の内面に取り込む。

【註】「ラジオを掛ける」と辞書には載っていますが、今では「ラジオをつける」という人が多いようです。なぜ、「掛ける」→「つける」と変わったのか。「つける」は「電気をつける」のように、器械のスイッチを入れるだけであとは放っておく感じです。これに対して、「掛ける」は、器械に対して何か操作をする感じです。ラジオも始めのうちは操作の対象だったのが、次第に、スイッチをポンと入れるだけの対象に変わってきた、といえるのではないのでしょうか。

(2) 手話では日本語の「掛ける」をどう表現しているか

話は横道にそれますが、手話で「かける」をどう表現しているのでしょうか。全日本ろうあ連盟の『日本語手話辞典』には、21もの「掛ける」の用例がのっています。それらを日本語と手話との対応関係で分けてみると、以下のようになります。() は手話です。

1) 名詞 ヲ/ニ 掛ける ⇒ (名詞) + (「かける」に相当する手話)

服を掛ける⇒(服) + (かける①) [折り曲げた人差し指を引っかけないように前に出す]

ソースをかける⇒(ソース) (かける③) [親指と小指を立てた右手の親指を下にして回す]

迷惑／苦勞／心配をかける⇒(迷惑／苦勞／心配) + (与える①) [両手のひらを上に向けて前に差し出す]

お目にかける⇒(見る) + (与える①)

(かける) の手話は、このほかに、

5かける3⇒(5) (かける②) [両手の人差し指を交差させる] (3)

鍵をかける⇒(かける) ④ [左手の親指と4指で穴を作り、右手人差し指を引っかけように入れる]

の二つが載っていますが、いずれも意味が限定されていて、ほかの名詞との結合がありません。

2) 名詞 ヲ/ニ 掛ける ⇒ (名詞) + (意味にあった手話の動詞)

橋を架ける⇒(橋) (作る)

裁判にかける⇒(裁判) (申し込む)

大金をかける⇒(高い) (払う②)

保険をかける⇒(保険) (入る)

胡椒をかける⇒(胡椒) (ふりかける)

時間をかける⇒(時①) (長い②) [親指と人差し指をつまんだ両手を左右に揺らしながら開く]

毛布を掛ける⇒(毛布)(布団)

3) 名詞 ヲ／ニ 掛ける ⇒ (一つの手話)

電話をかける⇒(電話をかける)

腰をかける⇒(座る)

掃除機を掛ける⇒(掃除機)

火にかける⇒(煮る)

声にかける⇒(呼ぶ)

天秤にかける⇒(比べる)

気にかける⇒(考える)

計略にかける⇒(ごまかす)

期待をかける⇒(期待する)

集合をかける⇒(集める)

まじないをかける⇒(まじない)

眼鏡をかける⇒(眼鏡)

以上見てきたように、日本語の「名詞 ニ／ヲ かける」は、手話においては、大部分は、それぞれの意味にあった動詞の手話を使って

(名詞) + (動詞)

としたり、名詞と動詞が一体化した一つの手話で表されたりしています。

日本語の「名詞 ニ／ヲ かける」に近い構造の表現は、

服を掛ける⇒(服) + (かける①)

ソースをかける⇒(ソース) (かける③)

迷惑／苦勞／心配をかける⇒(迷惑／苦勞／心配) + (与える①)

ですが、(かける①)、(かける②)、(かける③)、(かける④)の手話は、特定の物に結びついており、それ以外の場合には、使われていません。

結局、日本語の「名詞 ヲ／ニ 掛ける」という言語形式に対して、その内容を表す手話の言語形式は、(名詞) + (意味に応じたさまざまな手話動詞)であったり、ときには、(名詞と動詞が合わさった一つの手話)であったりします。ですから、手話の中に「かける」に対応する単語はないということになります。つまり、「かける」に対応する一つの手話で日本語の「かける」を表現することはできません。聴覚障害児は、日本語の「かける」を含む文章の内容を手話表現するとき、それぞれの文脈において、意味にあった手話で表現することになります。そのとき日本語「かける」のコアが聴覚障害児の中に形成されていれば、「かける」の意味が容易につかめて、日本語から手話への翻訳も、よりの確にできるようになるでしょう。

(3) 現象素のイメージ図

国広哲弥『理想の国語辞典』(大修館書店 1997)には、「現象素」のイメージ図がいくつか載っています。

国広は、同音異義語と多義語の区別を、「現象素」に求めます。「川」と「皮」が同音異義語であって、一つの多義語ではないというのは、「川」の「現象素」と「皮」の現象素がちがうものであるからとしています。ここで「**現象素**」とっているのは、「語の用法と結びついた外界の現象・出来事・物

・動作など、感覚で捉えることのできるもので、言語外に人間の認知の対象として認められるもの」です。つまり、見たり聞いたり、触ったりという身体感覚によって認知されうるものです。以下に例示する「はいる」「さす」「とぶ」「まわる」等の語には、現象素があります。それに対して、「こと」「もの」のような形式名詞は、頭の中だけで作られた語であり、現象素を持っていません。

国広は一つの単語の多義を、ただ一つの現象素から派生するものとして捉えようとしており、多義分析の方法として、田中のコアとほぼ同じものと見られます。

したがって日本語動詞や名詞のコアを作っていくために、参考になります。いくつか紹介します。

図 「はいる」の現象素

【意味】ある移動主体が、囲まれた空間（平面あるいは立体）の内部に移動することを示している。

【用例】映画館にははいる。ガラスにひびが入る。保険にははいる。雨期にははいる。

図 「さす」の現象素

【意味】先のとがった棒状のもので対象物を「さそう」とするとき、まずその――を対象物の方向に向け（A）、次にその棒を対象物の方向に直線的に動かす（B）。最後に棒は、対象物の内部に突き刺される（C）。

【用例】 A 時計の針が3時を指している。

B 手を差し出す。日がさす。

C だんごに串を刺す。熱湯に水を注す。花瓶に花を挿す。

図 「とぶ」の現象素

【意味】ある物が空中に飛び上がり、空中を水平に移動し、再び地上に降りる。

下線は認知的に意識されている部分。

【用例】 A 鳥が飛ぶ。木の葉がとぶ。

B ローンの返済でボーナスの半分が飛ぶ。ヒューズがとぶ。

C しぶきが飛ぶ。

D 外相がワシントンに飛ぶ。跳び箱を跳ぶ。

E ページがとぶ。

図 「まわる」の現象素

【意味】回転する円板。ときに立体に拡大される。

【用例】①回転体そのものとして捉える用例……地球は回る。②円弧の運動……岬を回る船。地球を回る月。急がば回れ。外出のついでに先生のお宅へまわる [寄り道]。賛成にまわる。舌が回る。

5 コア理論の日本語学習への応用

筆者の知る限りでは、英語の「新感覚・キーワードで英会話」のような、コアを使った指導実践は、日本語教育の分野では、まだ見あたりません。しかし、コア理論の日本語教育への応用を目指す取り組みは、始まっています。複合動詞の指導と格助詞の指導についての取り組みを紹介します。いずれも、外国人の日本語学習者を念頭に置いています。

(1) 複合動詞の指導への応用

外国人の日本語学習者を対象とした、日本語指導にコア論を応用する試みが始まっています【註】。

【註】①松田文子、複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察—、言語文化と日本語教育 2002年5月特集号 ②松田文子、日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して、ひつじ書房 2004

1) 日本語学習者の「～こむ」理解度調査

松田は、複合動詞の習得は、日本語上級者にとっても、難しい課題であることを、次のような調査によって、裏付けています。

日本語の母語話者30人、非母語話者60名（韓国人30人、中国人30人、以下「学習者」と呼びます）を対象に、同じ課題を出した。その課題というのは、「～こむ」という複合動詞を含む日本語の短文について、自然な使い方か（○）、それとも不自然な使い方か（×）、を問いました。次は、その調査結果の一部です。

*文の頭の（○）（×）は、○または×と期待される文であることを示す。

（○）「セーターに編み込んだパンダがかわいい。」について、母語話者の100%が○としたのに対して、学習者で○としたのは、75%でした。

（×）「冬が来るので、母は一日中セーターを編み込んでいる」について、母語話者の100%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、72%でした。

母語話者と学習者の間には、かなりの差があります。文によっては、さらにこの差が開きます。

（×）「セーターの穴があいているところを母は上手に編み込んでくれた」について、母語話者の90%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、半数以下の47%でした。

（×）「うしろの人に押し込まれて、ホームに落ちそうになった」について、母語話者の93%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、わずか27%でした。

（日本語学習者への調査結果については、「～こむ」にどのようなコアを設定したのか、それを見たあとで、あらためて紹介することにして、先に進みます。）

松田は、こうした結果を考察して、外国語学習において、語の意味を一つ一つの用例の集積で獲得していく「用例収集法」では、習得に限界があると考えました。

では、どのようにすればよいのか。松田は、田中のコア論にその解決を求めます。日本語母語話者が、○×の判定においてほぼ一致するのは、「～こむ」という複合動詞の意味について、何か共通の概念・イメージが形成されているのではないかと考えます。外国人の日本語学習者にも、日本語話者の持っているのと同じ（または、近い）「～こむ」の概念・イメージを作るように支援できないか、というわけです。

だが、そのためには、「～こむ」の概念・イメージ（田中のいう語のコア）がどんなものであるか、まずはそれを明らかにしなければなりません。

2) 「～こむ」のコア

松田は、複合語「～こむ」の意味を次のように分析します。

例えば「顔にクリームを塗る」と「顔にクリームを塗り込む」は、どう違うか。「塗り込む」の方は、クリームを肌の表面に付けただけでなく、肌の内部にぎゅっと押し込む、というニュアンスになります。つまり、何かがある領域に入り、入るだけでなく、その中に留まる、という意味を持つ。このことを、次のようなコアのイメージ図式で表します。

「ぬる」のイメージ図式



「～こむ」のイメージ図式



「ぬりこむ」のイメージ図式

複合動詞「～こむ」には

- ・ある領域 (X) の内部への移動 [α] と
- ・その場 (領域Y) への固着 [β]

の、二つの意味があると考えます。ここで、領域Yは、領域X内での「難可逆的」つまり、一度入ったらそこから抜け出すのが困難だと、主観的に感ぜられる領域であり、物理的な領域ではありません。

例えば、「子どもたちが一斉にプールに飛び込んだ」の意味は、「飛ぶ」のコア図式と「～こむ」のコア図式を合わせて、次のような図式として、表わされます。

図

図 飛ぶのイメージ図式

「～こむ」のイメージ図式

図 「飛び込む」のイメージ図式

領域Xはプールであり、領域Yに入るのは、プールの中に留まっている状態を表します。

「車窓から懐かしい風景が飛び込んできた」という文では、領域Xは、視覚です。
「彼が13歳で芸能界に飛び込んで、いまや20年になる」では、領域Xは、芸能界です。

3) 「～こむ」には4つのタイプがある

松田は、「～こむ」には、次の4つのタイプがあると分析します。

Aタイプの「～こむ」

「男が店に暴れ込んできた」においては、複合動詞「暴れ込む」のV1（1番目の動詞）「暴れる」には、それ自体としては、（店に）入るといった「移動」の意味がありません。「暴れ込む」になって初めて、（店に）入る、という意味になります。このばあいには、「～こむ」の図式の、 $[\alpha]$ の部分（領域Xに移動する）が意味として追加的に出現したと考えられます。このことを「 $[\alpha]$ の部分が焦点化している」といいます。

図 Aタイプのコア図式

Bタイプの「～こむ」

「泥棒が留守宅に入り込んだ」においては、V1の「入る」自体が、（領域X＝留守宅への）移動を意味しています。ですから「入り込む」の「～こむ」は、（領域X＝留守宅への）移動を意味するものではありません。では、「泥棒が留守宅に入った」とのちがいは何だろうか。この場合、「～こむ」で「入る」に追加された意味は、領域Xに入るのではなく、領域Yにはいり、そこに留まることの強調にある、と考えます。図式でいうと、 $[\beta]$ の部分が焦点化しており、「しっかりV1する」という意味になります。【註】

図 Bタイプのコア図式

【註】「迷路に入り込む」「野良猫がわが家に入り込む」「体内に入り込んだウイルス」など——には、「本来はいるべきではないものが（入りたくない、または、入って欲しくないのに）に入った」というニュアンスがあります。このニュアンスは、「入り込む」の「内部に固着して（出たい／出て行って欲しいのに、出られない／出ていかない）」という意味によって表現されている、と解釈できます。

Cタイプの「～こむ」

次に、二格をとらない、つまり「～ニ～こむ」という形にならない「～こむ」があります。「考え込む」「話し込む」「冷え込む」「眠り込む」の類です。松田はこれをCタイプとし、「ある状態への変化という抽象的な内部への移動」と見ます。

「考え込む」の図式は、領域X（考えている状態）において、そこからなかなか抜け出せない状態（考えることに没頭している）に移行したことを意味している。「冷え込む」「眠り込む」においても、V1（冷える、眠る）の結果、その状態に留まる（ただし、意図的にそうなったのではなく、無意志的・結果的に）、という意味になる。

図 Cタイプのコア図式

Dタイプの「～こむ」

最後にDタイプとして、「走り込む」「投げ込む」「煮込む」の類があります。これは、V1の反復行為あるいは長時間にわたる行為によって生ずる状態変化——例えば「走り込む」は、(マラソン大会に出場するという目標に向けて)満足できない状態から満足できる状態への変化——を表す。「投げ込む」「煮込む」においても、満足なレベルに向けて、くり返し、持続的に、V1が行われる。この点はCタイプと同じですが、ここでは、V1が意志的になされる点が異なります。

図 Dタイプのコア図式

以上を整理すると、次の表になります。

二格を伴う「～こむ」	
Aタイプ	Bタイプ
V1は「内部移動」を含まない。	V1自体が「内部移動」を含まれる。
例) 飛びこむ 呼びこむ	例) 入りこむ 埋めこむ 植えこむ 住みこむ

二格を伴わない「～こむ」	
Cタイプ	Dタイプ
V1が示す状態への変化とその状態への固着。(無意志動詞)	V1の反復行為により生じる状態変化(目標に向けて)(意志動詞)
例) 眠りこむ 冷えこむ	例) 十分に走りこむ

4) コアから見た日本語学習者の調査結果の分析

Aタイプの「～こむ」

(×)「父が交通事故にあったと聞き、**大急ぎで事故現場に駆け込んだ**」に対して、母語話者の83%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、わずか23%でした。この文が×なのは、「駆け込む」は「～の中に入る」を意味するが、「交通事故の事故現場の中に入る」が不自然だからです(事故現場がビルの中なら自然な場合がある)。学習者の多くは、「駆け込む=大急ぎで行く」と誤解していたようです。

すでに見た(×)「……母は一日中セーターを**編み込んで**いる」、(×)「セーターの穴があいているところを母は上手に**編み込んで**くれた」が共に×なのは、「～こむ」が「～の中への移動」という意味を追加してしまって不自然になるからだ、と説明できます。この場合「～こむ」を付けずに、「編んでいる」「編んでくれた」が自然なわけですね。

Bタイプの「～こむ」

(○)「おじの家に**住み込んで**、翻訳の仕事を手伝うことになった」に対して、母語話者の87%が○としたのに対して、学習者で○としたのは、85%でした。大差ありません。しかし、

(○)「父の看病のため、病院に泊まり**込んだ**」に対して、母語話者の90%が○としたのに対して、学習者で○としたのは、55%でした。さらに、

(×)「電車がホームに**入り込んで来た**」に対して、母語話者の100%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、65%でした。

この場面では、Y領域への「内部移動」はないので「入ってきた」が自然です。

(×)「どこの家だって、10年も**住み込んだら**、ものは山とたまる」に対して、母語話者の93%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、わづか42%でした。また、

(×)「この町のマンションを買って引っ越したのが5年前だから、この町に**住み込んで**もう5年になります。」に対して、母語話者の100%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、48%だけでした。

「住み込む」の「～こむ」は、たんにマンションや町に「住む」のではなく、そこに留まって何かをする(という状態への内部移動)——ふつう、使用者や師匠の家に住んで働いたり学んだり——という意味になります。「住み込み」は慣用句化しています。上の二つの文は、住む時間の経過を述べているだけですから「住む」が自然で、「住み込む」は不自然になります。

Cタイプの「～こむ」

(×)「一週間よく**考え込んでみましたが**、やっぱり今回は辞退します」に対して、母語話者の97%が×としたのに対して、学習者で×としたのは、58%でした。

これが×となる理由は、「考える」「話す」は意志動詞だが、「～こむ」がついて「考えこむ」「話し込む」になると、無意志動詞になるからです[「考えこむ」「話し込む」が無意志動詞であることは、「考え込もう」「話し込もう」、という言い方がヘンであることからわかる]。つまり、知らず知らずのうちに(無意志的に)考えてしまう、話してしまう、という意味になります。ところが、この文脈では、「一週間よく考えてみた」のですから、無意志動詞は、文脈にあっていません。ここではコアだけでなく、「～こむ」がくっつけられる動詞と文脈の整合性(共起の条件)も入ってきます。

このように、「～こむ」のコア図式は、さまざまな「～こむ」動詞の意味を、かなりうまく説明しています。

(2) 格助詞の指導への応用 以下次号につづく

